3

「……今日も連絡、来ませんでしたねえ」
ベーカー街２２２Ｂのリビングから窓の外を眺め、夏目銀助が寂しげにつぶやく。同意するかのように、足下で丸まっていたワガハイがニャアと鳴いた。
今日のロンドンは一日雨で、激しくはないが止むことなく一日中降り続けていた。まだ日没まで時間があるが、すでに通りは薄暗い。ベーカー街のガス灯にも、火が点されつつあるようだ。
コナンが行方を眩ましてから四日。銀助がつぶやいた通り、一度電報が届いた他には、コナンからはなんの連絡もないままだ。
「……コナンお兄ちゃん、どうしちゃったのかな……」
「これがアーサー君なら奇行も慣れっこだけど、コナン君だと落ち着かないわよね。私たちが心配してるって、気が回らないコナン君じゃないのに」
「……あのとき私が目を離さなければ……まさか、こんなことになるなんて」
「まあまあ、ターナさん。マリーちゃんにサラちゃんも。一応電報は届いてるんですよ？　いまごろ慣れないフランスで右往左往してるかもしれないんですから」
銀助は元気のない三姉妹を慰めたが、自分が口にした台詞は、まるで信じていなかった。コナンが消えた状況が特殊過ぎるし、電報ひとつで説明を済ませるというのも、いかにも律儀な彼らしくない。
実際、銀助だけでなく、ハドソン家の三姉妹も、口にしないだけで同じ思いだろう。あの電報は、受け取った側にさらなる不信感を植え付けているだけなのだ。
いま２２２Ｂのリビングにいるのは、銀助とターナ・ハドソン、マリー・ハドソン、サラ・ハドソンの四人。それにワガハイの一匹だけだ。本来の住人であるコナンは失踪したままで、アーサーは自室に籠もっている。銀助がここにいるのは、アーサーが電報を打つ際に使い走りをしているためである。三姉妹はコナンを心配して、ここ数日は時間があれば２２２Ｂに顔を出していた。
「にしても、アーサー君はこんな時まで発明なの？　それともコナン君を探すために籠もってるの？」
「両方ですかね。『いまは待つ』と言ってましたが、『そのときに備える』とも言ってましたし。結局、『お土産』も持って帰って来ちゃいましたしね……」
「お土産？　何それ？」

「知らない方が幸せですよ？　それから、部屋に籠もってはいますが、アンテナは張ってるみたいです。おかげで、朝から雨の中、何回電報局との間を行き来させられたか……まあ、コナン君のためだし、良いんですけど」
と、そのとき階段の下で、玄関の呼び鈴が鳴る音が聞こえた。
ターナが慌てて立ち上がったが、「ああ、大丈夫、大丈夫です」と銀助が先に部屋を出る。廊下から階段を降り、ひいひい言いながら戻って来たときには、両腕に山のような紙の束を抱えていた。
銀助はリビングに入ると、紙の束を抱えたままアーサーの部屋に続くドアの前に立ち、
「アーサー君？　市警（ヤード）から次の分が届きましたよ？」
とドア越しに大声で呼びかけた。
するとドアが開き、銀助はえっちらおっちらと中に入った。そのままドアは閉まりかけたが、完全には閉まらず半開きになる。
「これもまた広げるんですか？　前のは――ああ、はいはい、触りませんよ。じゃあ、新しい分はこの辺に？　やります、やります。ちょっと待って下さい」
ドアの隙間から銀助の声がもれ聞こえる。しばらくして、やれやれと肩を揉みながら、アーサーの部屋から銀助がリビングに戻った。
マリーがぽかんとした顔で銀助を見やる。
「なに、いまの？」
「スコットランド・ヤードから送られて来た報告書ですよ。とにかく、現時点でスコットランド・ヤードで把握している限りの、ロンドン市内で起こったあらゆる事件の概要です。レストレード警部にお願いして、部下の方に署内の記録をまとめてもらってるそうですね。さっきのが――えーと三回目だから、一週間前から十日前までの分になります」
「あ、あらゆる事件って……ええっ！？部？　ロンドンの事件、全部!?」
「はい。市警（ヤード）で記録されている、すべての事件、です」
気持ちはわかると言いたげな疲労感の漂う銀助の返答に、マリーの眼鏡がわずかにズレ落ちた。
「そんなの、十日前までも、すごい数でしょう？　いくら概要って言っても……アーサー君、一体何をしているの？」
「えーと……特に口止めされてるわけじゃありませんが、何をどこまで話していいものやら。とりあえず、ロンドン全体の『動き』が見たいそうですよ？　特に、裏側の。そこから『抗争の痕跡』を見つけ出すんだそうです」
「……いや、だから、つまりそれって、何をしてるわけ？」

「うーん……」
もっともな質問だとは思うが、銀助にせよ、理解できているわけではない。アーサー自身は「こういうのは姉の得意分野なんだがな」とぼやいていたが、彼の場合、『お土産』の改造を並行してーーしかも急ピッチでーー行いながらの分析だ。正直、どうかしていると思う。
「銀助ちゃん？　アーサーくんはちゃんと部屋にいるんだよね？」
「いますよ。ただ、とにかく手が離せないーーというより、その時間が惜しいようですね。昨日も徹夜だったみたいですし……。ああ、そうだ。ターナさん。申し訳ありませんが、夕食にサンドイッチか何か、簡単につまめるものを作ってもらっていいですか？　アーサー君、ここ数日ろくに食べてませんから」
「わかったわ。もちろん構わないわよ。いっそみんなの分を作るから、一緒にここで夕食にしましょう」
不安そうなサラを気遣ったのか、ターナが明るい口調で言った。
ただ、ターナが席を立つより先に、廊下から階段を駆け上がる足音が聞こえてきた。ワガハイが騒音に抗議するように、シャアと鳴き声を上げた。
そう言えば、さっき報告書を受け取ったとき、両手が塞がったので玄関の施錠をしていない。銀助は思わず身を固くしたが、足音はリビングに入るドアの前で止まり、代わりに強いノックが響いた。
「アーサー！　銀助！　いるか？」
クラウスだ。「開いてますよ！」と声をかけると、クラウスはさっそくドアを開けてリビングに入った。手足が雨に濡れているが、気にする素振りもないーーと言うより、それどこではない様子だ。
「出たぞ。発見が遅れたが、一気に三人ーーって、タ、ターナさんっ!?　いえ、ミス・ハドソーー」
「ターナで結構ですよ、レストレード警部。それより、そんなに慌てて、何かあったんですか？　ひょっとしてコナン君のことで、何かわかりましたか？」
顔を真っ赤にするクラウスに、ターナはいつにない真剣な面持ちで尋ねた。クラウスもただちに浮ついた様子を抑え、「いや、違います」と申し訳なさそうに答える。
「コナンの件は何も。……ただこれは、アーサーが待っていた報告なんですよ。《ジャック・ザ・ナイトメア》の、新しい被害者です」
クラウスの台詞に、三姉妹が息を呑む。
同時に、隣室との間のドアが開け放たれた。
アーサーだ。乱暴にまとめた紙の束を片手に抱え、額の上には黒眼鏡を乗せていた。わずか

な間に頬が痩け、目の下に隈ができている。だが、双眸は強い光を宿していた。
「アーサー君！」
マリーが思わず叫び声を上げたが、アーサーは返事をしないまま、ずかずかとテーブルに近付いた。
抱えていた紙の資料を卓上にぶちまけて、
「場所は？」
と、ぶちまけた紙を次々に並べながら、鋭く質問する。一拍遅れて自分に聞いているのだと気付いたクラウスが、「ああ」と慌てて手帳を取り出した。
「ランベス区のブロード街に近い、河岸の倉庫だ。被害者は三人。ただし仮面はひとつだけだ。二人は倉庫内で殺され、一人は裏口を出てすぐの場所に倒れていた。仮面があったのは外の一人の側だ」
「……わざわざ残したのか。何かトラブルでもあったか、あるいは別のメッセージか……ひょっとすると内部に向けて？　あり得るな……」
「わざわざって……アーサー？　《ジャック》が犯行後に仮面を残すのは、これまで通りだろ？　むしろ、仮面の数が被害者に合ってない」
クラウスが疑問を口にすると、アーサーはテーブルに並べた資料の中から、素早く何枚かを取り上げた。
「……ここに並べた事件は、どれも《ジャック・ザ・ナイトメア》とモリアーティが『動いた』結果である可能性が高い。特に、これらの殺人」
アーサーはそう言って、つかんだ数枚の紙を、真っ直ぐクラウスに突きつける。
「どれもまだ未解決だが、おそらく《ジャック》の犯行だ」
「な、なに？　いや、しかし、どの現場にも仮面は――」
「《ジャック》が仮面を残していた理由は幾つか考えられるが、最大のものはモリアーティへの警告。そして、彼の仲間たちに対する威圧だ。だが、もうその必要はなくなった。いま現在、《ジャック》はシンプルに『対象を排除する』よう行動している。他にも、『反撃に備える』意味で、仮面を外すリスクを取れなくなったとも考えられる。相手を殺害した直後に、モリアーティたちの襲撃を受けないとも限らないからな。今回の被害者、身元はもうわかってる？」
「あ、ああ……」
アーサーは淡々と、しかし熱の籠もった声で推論を述べていた。そんなアーサーに気押されつつ、クラウスは読んでいた手帳を差し出す。アーサーは受け取って一読した。
「……この三人もモリアーティの一味だな。共通点がなさ過ぎる。こんな遅くに、こんな場所に集う理由がない。ただ、一箇所に集まっていたということは、なんらかの共同作業を行って

いた証左でもある。幹部クラスではないかもしれないが、モリアーティの指示で集まった結果だ。《ジャック》だけじゃなくモリアーティたちも、一斉に『動いて』いる……」
「仮面は無関係……それが本当なら、ひょっとしてこっちの事件も関係してるのか？」
そう言って、クラウスは手帳を取り戻し、違うページをめくってからアーサーに渡し直した。
「三人の遺体に関する報告が遅くなったのには理由があってな。スコットランド・ヤードは今日、朝からこっちの件で人手を割かれてたんだ」
「……この記述か。ホワイトチャペルで乱闘？」
「昨日の深夜、閉店した酒場（パブ）で、複数の人間が争ったらしい。もっとも、あの辺じゃ乱闘沙汰なんて日常茶飯事だからな。通報があったのは朝になってからだ。出向いたところ、確かに酒場（パブ）は派手に壊されてて、かなりの量の血痕も残っていた。幸い、店主はその晩、仕入れ先で飲んで、そのまま泊まっていたようでな。おかげで無事だった。すぐに取り調べたが、心当たりはないってことだ」
「……遺体は？」
「出てない。ただ……現場には死体を引きずったようにも見える血の跡が、幾つもあった。それで、念のためってことで本格的な捜査を始めた矢先に、《ジャック》の仕業らしい遺体が三つ見つかったわけだ」
「……ホワイトチャペルの捜査は中断したわけじゃないんだな？　周辺への聞き込みの結果は？　目撃情報はあった？」
「いまのところ報告はない」
「なら、関係があると見るべきだ。あの辺りは確かに治安が悪いが、一方で住民は物見高いし、路上で暮らす者も多い。大量の血痕があったのは事実だし、ただの乱闘沙汰なら、怪我人の目撃情報があって然るべきだ。死体を運んだとすれば、なおさらさ。なのに、それがないということは、『ただの』乱闘沙汰ではないってことだ。《ジャック》とモリアーティの手の者が衝突した結果だ」
クラウスに説明ーーと言うよりは、自らに聞かせるように言って、アーサーは手帳を閉じ、ポン、と警部に投げ返した。
アーサーは改めて、テーブルに並べた事件記録をにらみつける。
「ひと晩に二箇所で……いよいよ激しくなってきたな。だが、痕跡は辿れても、向こうの動きを先読みするのは難しい。《ジャック》はおそらく特定の拠点を作らず、流動的に活動している。潜伏先を探すなら、まだしもモリアーティの側か。けど、奴にしてもこの状況下で、自分は動かずに指示だけ出しているとは考えづらい……。クソッ。決め手に欠ける。いっそ、もっと派手に事件を起こしてくれれば……」

アーサーは拳を握り、親指の爪を噛んだ。睡眠不足と疲労からか、事件記録をにらむ目が血走っている。下手に触れれば弾けて切れそうなほど、危険なまでに張り詰めているのがわかった。

重苦しい沈黙が立ち籠める中、窓の外の雨音とアーサーの低いつぶやきだけがリビングの中を行き来する。ワガハイがニャアウと悲しげな泣き声をもらした。

ただ、

「……ごほんっ」

その、恐ろしく下手くそで間の抜けた咳払いは、銀助だった。

アーサーが刃物で斬り付けるような眼光を向ける。

対する銀助は、にまっ、とだらしなく笑った。

「アーサー君？　顔、怖いですよ？」

銀助はそう言って、そっと視線で三姉妹を示す。

「……っ！」

アーサーが我に返り、いまさらながらテーブルの三姉妹に目を向けた。ターナは落ち着いているがアーサーを見る眼差しは厳しく、マリーは青ざめ、サラに至っては涙ぐんでいる。

アーサーは見る見る内に顔色を変え、青白くなったのち、微かに目元を赤くしながら顔を伏せた。

「すっ……すまない……頭に血が上っていた。謝罪する……」

アーサーは顔を伏せたまま、もごもごとくぐもった声で謝った。サラが小さくグスッと洟をすすり、マリーは長々と息を吐き出した。

「……あのさ？　アーサー君。この際、私たちにも全部話してくれない？　さっきから、心臓に悪い内容ばっかり耳に入ってきて、気が気じゃないわ」

「それは……」

「なんとなく、アーサー君がついに《ジャック・ザ・ナイトメア》を捕まえようとしてるのはわかったけど……それって、コナン君がいなくなったこととも、関係してるんだよね？　だったら……」

教えてほしいと訴えるマリーに、アーサーは言葉を返せない。

アーサーが激しい葛藤に揺れるのがわかった。

しかし、少なからぬ沈黙を挟んだ末、

「……すまない。君たちは知らない方がいい。知るべきではない」

「ちょっと！　コナン君のことでもあるんでしょ!?　それなのにーー」
「マリー」
思わず声を荒らげるマリーを、ターナがそっと制止した。
アーサーが伏せていた顔を上げる。ターナはさっきと同じ厳しい眼差しを向けていたが、アーサーと目が合って彼の顔を確認したあと、表情を柔らかくした。
「アーサーさんの判断を信頼します。貴方の足を引っ張ってたんじゃ、意味がないものね」
「……ターナさん」
「でも、ひとつお願いよ。このあとみんなの夕食を作るから、ここで、私たちと一緒に食べて。でないと、来月から家賃を倍にしちゃうから」
「……はい」
素直に頷くアーサー。銀助とクラウスが密かに視線を交わし、互いにだけわかるよう小さく頷いた。
「良いですねえ。助かります。『腹が減っては戦は出来ぬ』と、日本の諺にもありますからね。私もすっかり腹ぺこですし」
「図々しいですが、俺もご相伴にあずかれますか？　ターナさんの夕食とあっては、『食べるために生きる』のも本望というもので」
「お、イギリスの諺ですね？　『生きるために食べよ、食べるために生きるな』でしたっけ？」
「前半の台詞はこの場合、アーサーに贈らなきゃな。いまのこいつのウェイトじゃあ、その内、紙の山に埋もれて身動きも取れなくなっちまう」
二人の会話を皮切りに、リビングに笑顔が戻った。
アーサーはまだ目元を赤くしていたが、ふと銀助に顔を向けた。
「銀助。そう言えば、例の反応は……」
「ありませんよ。あったら、何を置いても真っ先に知らせろって、アーサー君が厳命したでしょ？」
銀助の回答に、アーサーは「そうか」と苦い表情で答えた。なんとなく憑き物が落ちたような様子だが、捜査に進展がない事実は変わっていないし、そのことを忘れたわけでもないのだ。
しかし一方で、焦ったから事態が好転するということでもない。
目の前の現実に立ち向かうには、正しく推理し、正しく行動せねばならない。そして、正しく推理し行動するためにこそ、出来得る限りの努力と工夫を重ねるのである。
「ところで、アーサー君？　さっき度々言ってた、モリアーティ、って誰のこと？」
「マリー？　聞かないって言ったばかりでしょ？」
「だってさあ」

唇を尖らせるマリーに、ターナは仕方なさそうに苦笑する。その苦笑がアーサーにも移り、彼はようやく余裕を取り戻した。
一瞬迷う素振りを見せたが、
「モリアーティなら、君も会ってるよ、マリー」
「えっ、嘘！　いつ？　どこで？　……あ、待って！　わかった！　ミスター・メリーウェザーの屋敷でしょ!?　急に出て来た、髪の長い男の人！　あのあと、結局アーサー君には誤魔化されたけど、あれって絶対ただ者じゃなかったもん！　あの男の人がモリアーティなのね？」
「……さらに言えば、ターナさんも会ってる」
「わ、私も？」
「ええーっ!?　じゃあ違うの？　でも、お姉ちゃんも会ってるってことは、依頼人の誰か？　え、誰!?」
マリーが頭を抱え、ターナは目を白黒させていた。
アーサーは意地悪く笑っていたがーー
不意にーー
真顔に戻りーー

「……そうか」

と、つぶやいた。
「……そうか。依頼に来た、あのとき……だから、世の中は、玄妙だ、と……」
アーサーは両目を瞠り、ここではないどこか遠く――遙か遠くを見つめながら言った。マリーが「え？」と聞き返したが、アーサーの視線は彼方に焦点を結んだままだった。
「……僕でも、姉さんたちでもない。モリアーティへの牽制。コナンは、やはり前にも……。だが、なぜ？　なぜ《ジャック》が、知っている？　《ジャック・ザ・ナイトメア》……ジャックという男は一体……。
……いや。
ああ。
そうか。
三年前の事件か。そういうことか」
アーサーはゆっくりとささやいた。
触れれば消えてしまう不確かな陽炎を、優しく慎重に、現像するように。
自らの意志によってではなく、突然降臨した「真実」に、そっと導かれるように。

ゆっくりと、ささやいた。
そのただならぬ様子に、再び一同の視線がアーサーに集まっていた。笑顔を取り戻していたサラが、また、表情を強張らせた。
しかし、アーサーは我に返ると、今度はサラに優しく笑いかけた。
「わかったよ。コナンは無事だ」
「ほんと!?」
「ああ。そのはずさ。いまは、まだね。ただ、これから危険な目に遭うだろうから、夕食を片付けたら、またそのときに備えるよ。あいつをーー助けに行かなくては」

＊

雨はまだ降り続いていた。
リトルジョージ街、ハリディ・ホテル最上階の一室。テニスが出来そうなだだっ広い部屋の窓側に立ち、コナンは眼下の街並みを見下ろしていた。
すでに日は落ちている。雨に煙るガス灯に照らされ、ガラス越しのロンドンはいつになく美しく見えた。街にこびり付く汚れを、雨は隠してくれる。だがそれは、暖かな部屋の中から外を眺めての感想だ。
冬の雨に濡れながら路上で朝を待つ絶望を、コナンは知っている。社会は広く複雑で、それを見つめる個人の視点はあまりにも狭いのだ。それこそ、《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面のように。
「失礼。戻りましたよ」
突然の声に、コナンは飛び上がりそうになるのを寸前で堪えた。
慌てて振り向けば、ドアの側にあるハンガーの前で、ジャックが雨に濡れたコートを脱いでいた。
いつ入って来たのか、まるでわからなかった。実行部隊の隊員たちは全員気配を消すのが上手いが、中でもジャックは別格だ。
「……遅かったな」
「ええ、まあ。明日に備え、舞台の下見もしてきましたので」
「明日？」
「はい。餌を撒いて来ました」
特になんの感慨もない様子で、素っ気なくジャックは答える。コートを掛けて部屋の中央に移動。テーブルを見て、「おや」とつぶやいた。

テーブルの上には、持ち込まれた大量の食料が並べられていた。チーズにパン、ビスケット。コールドビーフにポークパイ。林檎と、桃の缶詰。だが、どれも手を付けた様子がない。
「口に合いませんでしたか？　確かに、特に指定もせず用意させたので、取り留めがありませんが」
「単に食欲がないだけだ。その量は、俺一人の分でもないだろ。他の《ジャック》たちは、まだ来ないのか？」
「皆、食事には関心がありませんからね。補給が必要だと感じれば来るでしょう。私はもう頂きますよ。さすがに身体が冷えました」
そう言って、ジャックはテーブルに近付くと、チーズをひと切れつまみ上げて口に入れた。食料と共にテーブルに置かれたワインボトルに手を伸ばし、コルクを開けてグラスに注ぐ。
「一緒にどうです？」
「食欲がないとーー」
「食べなければ持ちませんよ？　戦士にとって、食事は義務です」
ワインを呷り、ジャックは薄く笑う。コナンはしばらく無言で立っていたが、結局窓から離れ、テーブルのビスケットに手を伸ばした。
「……また殺して来たのか？」
「はい。もっとも、今回はほんのついでです」
ポークパイを噛りながら、平然とジャックが言った。露悪的な態度は、自分への当てつけだろうか。コナンはジャックを横目ににらみながら、ビスケットを口に放り込む。
「……さっきの話だが、明日何かあるのか？」
「ええ。明日はミスター・ワトソンにもお付き合い願います」
ジャックの台詞に、コナンは表情を硬くする。
「……殺傷することが前提なら、俺は役に立たないぞ？」
「ご安心を。貴方のスタンスは十分理解しましたので、それを踏まえた上で、役立って頂きます」
そう言って、ジャックは再びワインを飲んだ。
ジャックが何を企んでいるのか、コナンにはおよそ想像も付かない。現に、彼の部隊に加わってから自分が役に立ったことなど一度もないのである。
コナンに仇を討たせたいとジャックは言った。だが、いざそのとき、モリアーティの命を奪うことにコナンが躊躇したとすれば、ジャックはどんな行動に出るのだろうか。
コナンが黙り込んでいると、部屋のドアがノックされた。
特徴的なノックは、仲間内の合図だ。入って来たのは、昨日も顔を見せた女性だった。

「ジャック。ピーターが合流したのですがーー
「おや？　どうかしましたか？」
「はい。それがーー」
「ジャック！」
　女性が答えようとしたとき、彼女より早くドアがもう一度開き、雨で濡れそぼった男が部屋に押し入ってきた。
　古びたジャケットとベストに、継ぎのあるトラウザーズ。一見どこにでもいる労働者に見えるが、張り付いた前髪の下からのぞく眼光が、男の平凡な印象を裏切っている。
「ピーター。何事ですか？」
「どうして昨日、救援に来なかった!?」
「どうして？　あらかじめ伝えていたはずです。昨夜は私の隊も出動していました。後詰めに入れない旨は承知していたでしょう」
「その結果、こっちのチームは俺以外全滅した！　五人全員がだぞ！？ちらはたった三人、顔も知らない雑魚を殺しただけだそうじゃないか！　当然無傷で。それどころか、お荷物まで連れて！」
　激昂して怒鳴りながら、男ーーターはコナンに視線を向ける。鋭い眼光には、真冬の冷気を寄せ付けない灼熱の怒りが込められていた。
　ピーターという名前には覚えがあった。また、男の台詞を聞けば、彼が《ジャック・ザ・ナイトメア》でもうひとつのチームを率いていた人物だということはわかる。仲間を五人も失ったのなら、平静で居られないのも無理はない。ピーターの怒りの視線を、コナンは無言で受け止める。
「戦果が足りないとでも？　言っておきますが、昨夜の私の隊の目的は、倉庫に保管されていた敵の物資を奪取することです。目的は完璧に達成しています。むしろ、五人の犠牲を出しながらなんの戦果もない、自分たちを恥じたらどうです？」
「いいや、これは明らかな戦力の配分ミスだ！　何より、敵は俺たちを待ち伏せしていた。襲撃を読まれていた証拠だ。俺たちは、お前の杜撰な作戦のせいで、死地に送られたんだ！」
　ピーターは肩を怒らせ、指を突きつけてジャックを弾劾した。対するジャックはテーブルに軽くもたれかかり、ワイングラスを手にしたままピーターを見返している。
　興醒めだと言わんばかりに、「それで？」と聞き返した。
「結局貴方は、どうしたいのです？　私に謝罪して欲しいのですか？　確かに、理由はどうあれ、部隊から死者が出た以上、その責任は私にもあります。気が済むまで謝りますよ？　それとも、欲しいのは許しですか？　一人生き残った罪悪感に対する？」

「なっ、お、俺は！？
「《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面を被る以上、死の危険は常にあります。皆、覚悟の上だったはずでしょう。優先すべきは憎き敵を討つこと。怒りも罪悪感も、いまは無用です」
酷薄に告げるジャックに、ピーターは肩を振るわせて、続く言葉を呑み込んだ。
反論はしなかったが、視線の熱量はむしろ増している。コナンは息を呑んでピーターを見つめた。
「……俺は、降りる」
ピーターが吐き捨てるように言うと、ジャックの双眸が険しさをのぞかせた。
「なんのために合流させたとお思いです。いまがどういう戦況なのか、理解していないのですか？　戦線離脱は認めらません。貴方は貴重な戦力だ。私の隊に入ってもらいます」
「……断る。貴重な戦力？　ただの駒だろう？　それに、いくら敵でも、これ以上見ず知らずの他人を殺すのはうんざりだ。仲間も死んだ。俺は降りるぞ。親父だってきっと許してーー
と、そのときだ。
ピーターは突然パチパチと瞬きを繰り返し、自らの胸に手を当てた。その瞳から、あれほど激しかった怒りが消えている。
「……そうだよ。親父が……あの親父が、復讐なんて望むはずがない……俺、何をやってるんだ。仇討ちなんて。親父はずっと俺に、真っ当に生きろって……」
まるで、雨の降りしきる闇夜に、突然陽が差したかのように。
ピーターは呆然と両目を見開き、立ち尽くしていた。その突然の変化に、コナンは困惑する。
しかも、
「……私……わ、私、は……？」
最初に部屋に入ってきた女性まで、片手をこめかみに押し当てて目を瞠っていた。こちらは、ピーターのように夢から覚めたような様子はないが、顔は青ざめて血の気が失せている。冷静沈着で常に無感情だった彼女が、初めて見せる動揺だった。
ジャックが舌打ちした。
「緩んで来ましたか。参りますね。これからというときに」
ワインをひと息に飲み干し、ジャックは空のグラスを、タンッと音を立ててテーブルに置く。
「ピーター！」
テーブルから離れ、ジャックが強い声を放った。ピーターが反射的にジャックを見やる。二人の目が合って、視線が交わる。
その瞬間、ジャックの瞳が――右目の瞳孔が、怪しい光を放った。
「ーーあっ」

ピーターが、目尻が避けんばかりに両目を見開き、全身を激しく痙攣させた。
だが、それは一瞬のことだった。ピーターはすぐに瞳の焦点を失い、だらりと全身から力を抜いた。顔から表情が滑り落ち、まるで抜け殻のようになる。急な変化に、コナンは息を呑んだ。
もっとも、本当の「変化」はそのあとだった。
「全く、困ったものです」
ジャックがぼやいて、ニヤリと微笑む。
直後、

「まったくです」

ピーターがつぶやき、ニヤリと微笑んだ。それは、これまでの彼とは似ても似つかない微笑——だが、直前にジャックが浮かべたものと、全く同じ笑みだった。
「……な」
コナンが絶句する。
一方、ジャックはこめかみに手を当てたまま立ち尽くしている女性に近づき、
「まだですよ？　貴方の戦いは、まだ終わっていません」
女性の耳元にささやきながら、パチンと指を鳴らした。すると、女性の動揺が収まり、彼女は元の冷徹な面持ちになって頷いた。
コナンは、目の前の光景が、理解できない。
「こちらはまだ利いてますが、あちこちに襤褸が出て来ましたね。まあこの二人は長いですし、致し方ないでしょう。取りあえず、明日一日保てばいい」
そう独りごちて、ジャックはゆっくりと振り返る。
コナンは本能的にジャックからー彼の視線から、目を逸らした。それから、これでは不味いと思い、腕を上げて目の前にかざした。
ジャックの「目」を見ないよう、彼の頭部を腕で隠しながら、首から下だけに注目して動きを読む。ジャックが足を止めた。ククク、と低い笑い声が聞こえてきた。
「そうです。お上手ですよ、ミスター・ワトソン。仮面が手元にない場合、それが正しい対応です。もっとも……真に『力ある者』を前にしたとき、あまり意味はないのですけれど」
腕で視界を遮った向こう側から、ジャックのおかしそうな声が伝わってくる。
その直後、トン、と肩に手が置かれた。
コナンは凍り付く。ピーターだ。いや、ピーターではない。

「怯えないで下さい。黙っていたのは謝りますが、貴方に危害を加えるつもりはありません。昨日も言った通り、貴方には協力をお願いしたいのですから」
ピーターは、コナンの耳元に唇を寄せて、告げた。その声は間違いなくピーターの声だったが、ピーターの言葉ではなかった。コナンは彼から飛び退いた。
思い出した。あのときのターナと同じだ。《ロンドン・キャット・コンテスト》のあと、ターナに起きた異変。モリアーティが会場で、わざわざ忠告してきた変化だった。何故いままで失念していたのか。ゾワリ、と全身の肌が粟立つ。
そして、さっきのジャックの瞳。あれは……。
「貴様……!? その力は……!?」
腕を上げて隠しているため、ジャックの顔は視界に入らない。
それでも、そのときジャックが浮かべた笑みを、コナンははっきりと思い描くことができた。
「私も大いに意外だったし、おそらくは奴自身も同じ思いでしょうが……存外あの男には、情に脆い面があったようです。所詮は、大義を解さぬ愚か者ということでしょう」
「……大義?」
「ええ。『嚮主(あのかた)』の寵愛を受ける価値はない、ということですよ」
ジャックが嘲るように言う。そのとき、ジャックにコナンの注意が逸れた隙を突いて、ピーターが動いた。その動きには足音がない。「チッ!」とコナンはもう一度大きく彼から離れたが、離れたところで背後に何かぶつかった。
仲間の女性だ。撥ね除けようとしたが、相手が女性だと認識したせいで反射的に力を加減してしまった。女性はコナンの躊躇を見逃さず、彼の腕をつかんで動きを止めた。駆け寄ったピーターがコナンの足を払い、床に倒れた彼の背中にのしかかって抑え込む。
「くっ、くそ!」
抵抗したが無駄だった。体格はコナンと変わらないはずなのに、もの凄い力だ。リミッターが外れている。おそらくいまのピーターは、ナイフで刺されたとしても一切力を弛めないに違いない。
「些か不本意な形になってしまいましたが、やることは変わりません。予定通り、ミスター・ワトソンには明日役立ってもらいます」
「お、お前は一体、何者だ!? この男に何をした!」
「おや、いいんですか? 目が合ってますよ?」
ジャックの指摘に、「クッ!?」とコナンは顔を逸らす。
ジャックはゆっくりとコナンに近付き、うつ伏せのまま動けない彼を、身体を折って見下ろした。

「せっかくここまで来たんです。最後まで見届けて下さい。私が何者なのかも、明日にはわかりますよ。奴との決着の場でね。」
愉快そうなジャックの声に、コナンは奥歯を噛み締める。ピーターがクツクツと笑い、次いでジャックも同じように笑った。広いホテルの部屋の中で、二人の笑い声が重なり合った。
窓の外では、まだ雨が降り続いてい。雨は、当分止みそうになかった。

＊

昨晩だけで、死人が八人。その前夜にも死人は出たし、今晩も誰か死ぬだろう。状況が己の制御下を離れつつあることを、モリアーティは認めざるを得なかった。
「気に食わないな」
モリアーティは数名の同志ーー《解放者》たちと共に、小型の船でテムズ河を下っていた。人目を避けて潜伏場所から移動しているのだ。
真夜中である。漆黒の闇の中、降り続く雨が船の薄い屋根と河面をバラバラと叩いている。船先のランタンが健気に闇を裂いているが、光の中に映るのは反射しながら落下する雨粒と、光の先に広がる次の闇だけだった。
冬の夜、しかも雨天の河の上である。指先が凍り付きそうな寒さだったが、だからこそ誰にも気付かれることがない。視界の悪さは事故と隣り合わせながら、《ディオゲネス・クラブ》の目を完全に掻い潜るなら、この程度のリスクを取るのは当然だった。
「確かに、倉庫を抑えられたのは痛かったが、代わりにこっちは敵のチームをひとつ潰した。奴らは二、三班に分かれて動いていたから、これで戦力はほぼ半減。以後の作戦行動は大きく制限される」
「つまり、ここからは先の見えない消耗戦だ」
「結構じゃないか。奴は明らかに短期決戦の構えだ。長引けばこちらが有利になる」
「そして、痺れを切らした《沈黙館の魔女》が、別の手を講じてくるだろうな。我々はあの男の部隊だけじゃなく、《魔女》の見えざる呪いとも戦わねばならなくなる」
「別に構わないだろう。どうせいつかはぶつかる相手だ」
「頼もしい台詞だが、時期尚早だ。何よりもーー」
「なんだ？」
「美しくない」
「……悪かったな」
大佐は荒っぽく鼻を鳴らした。

雨は勢いを増しもせず減じもせず、バラバラと降り注いでいる。モリアーティは船の進む先を静かに眺めていた。

わずかな明かりを頼りに、凍える闇の中を進む。それは、彼らの在り方そのものだ。同時に、これこそが「自由」の本質だ、とモリアーティは定義する。

明かりとは、生きる意志。欲望だ。彼の《ギアス》は、凍える闇の中を進むための明かりを授ける力なのである。

「あの辺りか」

船が、仲間たちの死んだ倉庫の側を通りかかる。モリアーティは失われた光に、わずかの間だけ黙祷を捧げた。

「……それで？　消耗戦が美しくないなら、次はどういうのがお望みだ？」

大佐が揶揄するように尋ねると、モリアーティは意識を自らの前の闇に戻した。

《ディオゲネス・クラブ》が本当に恐れているのは、追い詰められたモリアーティが、政府や財界、軍の要人に矛先を向けることだろう。メリーウェザーの一件で、その脅威は証明されたはずだ。実際、彼の《ギアス》の真価は、そうした使い方にこそある。だからこそ、《ジャック・ザ・ナイトメア》も彼に暗躍する暇（いとま）を与えぬよう、電撃的な襲撃を敢行しているのだ。

なら、当然《ディオゲネス・クラブ》は抗争が長引くことを看過できない。

これまで彼女たちは、被害を最小限に抑えることを優先して消極的手段に終始していた。地下に根付いたモリアーティたちの中から、地面の上に現れた「芽」だけを刈り取ってきたのだ。

しかし、抗争が長引くと判断すれば、彼女たちはより痛烈な強攻策を取ってるに違いない。それこそ、周りの大地を掘り返してでも、「根絶やし」にするために。

ただし……。

「……そうだな。抗争の長期化は無視できないとしても、いまの時期に市内で強引な作戦を展開するとなると、それはそれで避けたいだろうな」

《ディオゲネス・クラブ》が長年大陸と交渉を続ける一大政策が、重要な局面に入りつつあることはつかんでいる。彼女らとしても、本音ではこの時期に強攻策など採りたくないはずだ。

そして、仮に《ディオゲネス・クラブ》の判断が「現状維持」に傾いた場合……彼女らにとって邪魔なのは、むしろモリアーティ排除に固執する《ジャック・ザ・ナイトメア》となることも十分あり得る。《ディオゲネス・クラブ》と《ジャック・ザ・ナイトメア》は、互いに相手を利用しているだけで、信頼で繋がっているわけではない。

「東洋で言う『離間計（りかんのけい）』だ。試して見る価値はあるかもしれないが……」

もし、読みが外れれば、今度は《ディオゲネス・クラブ》との総力戦だ。いつかはぶつかる相手と大佐は言ったが、いまの段階で事を構えるのは得策ではない。

何よりーー彼女たちとまともにやり合うなら、多大な犠牲を払うことになる。
「やはりシンプルに行こう」
「と言うと？」
「あの男を殺す」
今回《ディオゲネス・クラブ》はあくまでも裏方に回っている。《ジャック・ザ・ナイトメア》がーーもっと言えば、彼らを指揮する「あの男」さえ消えれば、戦況は沈静化する。
素っ気なく決断を口にしたモリアーティだったが、それを聞いた大佐は、表情を引き締めるどころか、逆に失笑した。
「さては飽きたな？」
「黙るがいい」
「だが、どうやって捜し出す？　逃げ足は一級品だぞ」
「逃がさない手を、これから考えるさ」
とぼけて返事をしたが、実のところ、あの男を追い詰める手段ならすでに幾つか考えてある。状況に応じて最適な策を選ぶだけだ。
やがて、船は無人の船着き場に着いた。大佐が指示を出し、同乗していた仲間たちが無駄のない動きで船を下りる。全員下船したのを確認して、モリアーティも桟橋に移動した。たちまち雨が全身を濡らしたが、大佐が傘を差し、彼の頭上に掲げた。
「《教授（プロフェッサー）》！」
桟橋を渡ったところで、一人の男が近付いて来た。アーサーやコナンが見れば声をもらしただろう。メリーウェザーの屋敷に現れた、インタビュアーのビンセントである。
ビンセントはモリアーティに駆け寄り、
「ステイラーがやられました。ただ、同行していた二人は逃げ延びてます」
「今夜は彼か。しかし、他の二人が無事？」
「どうも今回、向こうは一人で襲撃を仕掛けたみたいです。ステイラーを殺したあとは、すぐに居なくなったと。ただ、現場には、こんな物が」
そう言って差し出したのは、もはや見慣れた《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面だ。ただ、裏に油紙に包まれた手紙が添えられていた。
モリアーティが受け取り、手紙を取り出す。ビンセントがマッチに火を付けて明かりを点し、傘を差したままの大佐も、モリアーティの背後から彼の手元をのぞき込んだ。
手紙を読んだビンセントと大佐が、表情を険しくして、モリアーティの顔色をうかがう。
そのモリアーティは、周囲の夜気よりさらに冷たい、氷塊のような笑みをのぞかせた。
「……ああ……そう言えば、ここしばらくベーカー街には気を回していなかったな。監視も怠

っていた」
モリアーティはそうもらすと、手紙を畳み直して懐に入れた。
「私としたことが。飼い主（クラブ）に気を取られすぎて、猟犬の躾の悪さを失念していたな。しかし、サービスの良い男だ。こちらが探すと決めた途端に、パーティーに招待してくれるとは。もっとも会場は直前まで秘密という趣向のようだが」
「待って下さい！　これは明らかにーー」
「罠なら何か問題があるかね？　ロンドン中からあの男を捜し出す手間と、向こうの罠を粉砕する手間。効率が良いのは、どちらだろうか、大佐？」
「……ただの罠なら、後者だろうな。だが、これは……いいのか？」
モリアーティが、背後で傘を差す大佐を見上げる。
女性と見紛う美貌に氷の笑みを浮かべたまま、モリアーティはキッパリと告げる。
「言ったはずだ。これ以上、過去の因縁に煩わされるつもりはない」

＊